

## 考古－４ ナイフ形石器

<sup>あいら</sup>始良Tn火山灰降下前後の後期旧石器時代を代表する石器の一つにナイフ形石器があります。今から2万年前後に北海道を除く本州・四国・九州で発達した石器で、地域によって特徴があります。九州型のナイフ形石器は主に細長い石の破片で作られ、剥片の鋭い刃部の両側の縁に刃潰し加工を加え、木葉状のナイフ形に仕上げられています。切る道具としてのナイフのほか、柄の先につけて槍先とし、突く道具としても使用されました。

ナイフ形石器をつくるには、石が割れた時にできる鋭い縁が重要なので、素材としては硬くて緻密な石、宮崎県では頁岩、<sup>けつがん</sup>流紋岩<sup>りゅうもんがん</sup>や砂岩などが多く用いられています。

